

敦煌本玉篇の第三殘片*

高田時雄

はじめに 敦煌遺書中の『玉篇』はこれまで二點が知られている。一は英藏のS6311『善惡因果經』の背面に貼付された數行の斷簡で、『玉篇』髟部の髻、鬣の二字を存し、いま一點は俄藏のДx1399+2844で、破損が多いものの、彡部の彰、彤、影、須部の須、鬻、鬻、鬻、頽字に相當する部分、雙行小字注にして二十二行が残っている。また俄藏殘片の背面には『論語』郷黨第十の何晏集解が書寫されている。掲出字を大きく出し、雙行注の小字は毎行ほぼ十七字、注の最初に朱字で字音を注記するなどの特徴は兩殘片に共通しており、端正な楷書も同一人の筆跡と見られるから、これらを同じ寫本の殘片と判断して誤りはない。英藏の小殘片は糊付けされているため、紙背の文字を見ることが出来ないが、背面には恐らく俄藏殘片と同じく『論語』が書寫されているものと思われる。これら二點の殘片については曾て些か論じたことがある¹。

今日通行する『玉篇』は宋初のいわゆる大廣益會本だが、これが注文の大幅な刪略によって、顧野王原本の姿を全く失ってしまった本であることは、日本古寫本に伝えられた原本のテキストと引き比べてみることで一目了然である。しかし顧野王原本から大廣益會本に至るまでには、その中間に各種の異本があったはずで、唐の上元年間における孫強の増字などはその一例だが、それ以外にも様々な改變が行われていたと想像される、しかしながら唐代に行われた『玉篇』諸本が実際に如何なるものであったかは、材料に乏しく明らかではない。その意味では、敦煌本の存在は小殘片とはいえ、唐代の『玉篇』の姿を瞥見し得る點で、極めて重要なものと言える。

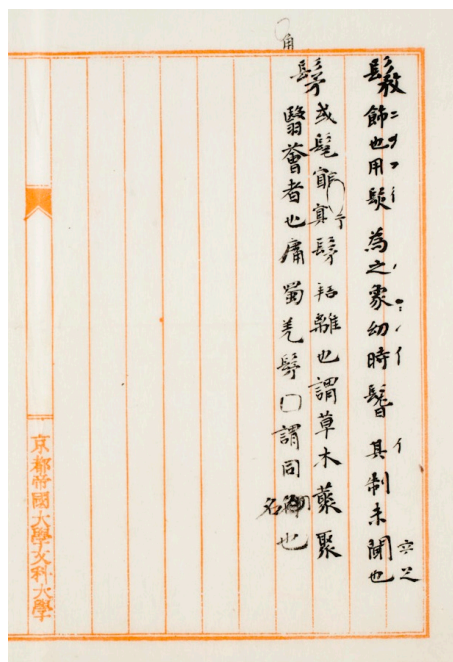
*小文は日本學術振興會科學研究費基盤研究（A）「中國典籍日本古寫本の研究」（課題番號：25244014）による研究成果の一部である。

¹高田時雄「玉篇の敦煌本」『人文』（京都大學教養部）33（1987）、53-64頁；「玉篇の敦煌本・補遺」『人文』（京都大學教養部）35（1989）、162-172頁。

一、第三殘片發見の経緯

明治四十三年（1910）九月から十月にかけ、京都大學の五人の教官が北京に赴き、敦煌の藏經洞から北京に移送されたばかりの敦煌遺書の調査に当たった²。恐らくこの調査行の主導者であったと思われる湖南内藤虎次郎は、歸國後「敦煌の古書は何れかと言へば稍失望の結果であった」と言い、「殆ど全部佛經である」ことに落膽を隠していないが、それでも彼らは學部所藏の八百點を閲覽し、七百點については『清國學部所藏敦煌石室寫經繙閱目錄』を作成し、必要なものは寫眞を撮影して持ち歸った。この目錄と寫眞は時を移さず當時京都大學の佛教學教授であった松本文三郎に提供され、松本の手になる「敦煌石室古寫經の研究」が翌年の『藝文』誌上に掲載された。この松本論文は北京藏敦煌遺書に對する最初の研究として、これまでもしばしば取り上げられてきたものの、原材料となった『繙閱目錄』そのものは、長くその所在が明かでなかった。しかるに筆者は幸いにも近年關西大學の内藤文庫中にこれを發見することができ、内藤湖南の敦煌遺書調査に關する他の材料とあわせて公刊することができた³。

『繙閱目錄』は地字第一から始まり、黄、宇、宙、洪、荒、日の各文字それぞれ百點づつ計七百點の敦煌遺書につき、經卷の名稱、料紙の種類、書風などを簡単に記し、題識、印記の有無も記録してある。注意すべきは末尾に「北京某氏藏敦煌出土寫經」として七點を附載していることである⁴。また目錄とは別に右圖のような一紙が附屬している。目錄本文を見ると、洪字第三十「阿彌陀經」の箇所に、「書風鎌倉期二似タリ。背二字書アリ」という注記があり、この紙片は背面の字書の文字を寫し取ったものらしいと知られる。この一紙とは別に、「應照者 九月廿三日於學部考定者」として、



洪字第卅號 背面有字書

²この調査行の経緯については、高田「明治四十三年京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第七卷（2004）、13-27頁にやや詳しく述べておいた。

³玄幸子・高田時雄編『内藤湖南敦煌遺書調査記録』、關西大學出版部、2015年1月刊。

⁴この「附見目錄」を含め、『繙閱目錄』については、注3に掲げた書物の前書き「内藤湖南の敦煌遺書調査及び関連資料」を参照されたい。

荒字第五十四號 報恩寺印
日字第十一號 懺悔滅罪金光明經冥法傳
日字第八十四號 六朝寫經

の四點を書き出したメモも附屬している。ともに目録本文と同じ「京都帝國大學文科大學」の文字が入った用箋を使用していて、調査現場で書かれたものであることは疑いを容れない。九月廿三日というのは、派遣員の五名が學部所藏敦煌遺書の調査を行った三日のうちの最終日に当たっている⁵。この二紙の文字は同一人物の手になるものだが、目録本文とは筆跡が全く異なる。筆者の想像では、これは派遣員の一人狩野直喜によるもので⁶、調査最終日に際して、寫眞撮影すべき番號を指示するとともに、洪字第三十紙背の字書については、自ら備忘のために手録したものであらうと思われる。

ところで洪字第三十は、現在國家圖書館には無く、『敦煌遺書總目索引新編』によれば、「空號，現存歷史博物館」となっている⁷。無事、歷史博物館に所藏されていることを願いたいだが、既刊の圖録等には収録されておらず、原姿に接する便宜が得られないのは遺憾である⁸。ともあれ『玉篇』殘片の一つが、1910年という早い時期すでに發見されていたことは頗る興味ある事實と言えよう。

二、洪字第三十紙背の殘片

しかしこの小殘片が『玉篇』であり、すでに英藏及び俄藏中に見出されたものと同一寫本の離れであることは、容易に推測し得る。『阿彌陀經』の紙背に見えるというのであるから、おそらくは英藏殘片が『善惡因果經』の背面に貼付されているのと同様に、補修紙として用いられているのであり、『阿彌陀經』の紙背に直接書かれたものではないと思われる。狩野による録文の右端行が、各文字の左部分の點畫しか寫していないのは、ここで用紙が切斷されていたからに相違ない。この殘片のテキストを改めて以下に移録してみよう。

⁵上掲の玄幸子・高田時雄編『内藤湖南敦煌遺書調査記録』、5頁。

⁶後日、令孫の狩野直禎教授にこの寫眞を示して鑑定を請うたところ、間違いなしとの判断を頂戴した。ここに附記して狩野教授に感謝したい。

⁷敦煌研究院編『敦煌遺書總目索引新編』（中華書局、2000年）、354頁。『中國國家圖書館藏敦煌遺書總目録・新舊編號對照卷』（中國人民大學出版社、2013年）は「空號（提送歷史博物館）」とする（26頁）。

⁸柴劍虹氏にはわざわざ中國國家博物館（歷史博物館の現在の名稱）及び關係者に對して、該寫本の行方につき調査していただいたが、結局現時點（2015年12月）でも不明のままである。

髻 □□□□□□□□□□□□□□□□

飾也用髮爲之象幼時髻⁹其制未聞也

髻 或髻□覲髻□離也謂草木藂聚

翳薈者也庸蜀羌髻□謂同名也

髻字の注は雙行のうち、右行の部分が脱落しているために何が書かれていたか
分明でないが、恐らく『説文』の「髻、髮至眉也」、『詩』の「紈彼兩髻」の字義に
關わる注があった筈である。いまこのテキストに残存する注、「飾也、用髮爲之、
象幼時髻、其制未聞也」というのは、『禮記・内則』の「子事父母，雞初鳴，…拂
髻」の「拂髻」に對する鄭玄の注文「用髮爲之、象幼時髻、其制未聞也」をその
まま援用したものである。しかし出典については一切言及されない。

一方、髻字の注は二つの部分に分かれる。最初の注「□覲髻、□離也、謂草木藂
聚翳薈者也」とあるのは、『爾雅・釋詁』の「覲髻、莠離也」及びその郭璞注「草
木之叢茸翳薈也」を用いたものであることは明白だが、最初の「□覲」部分が解
しがたい。狩野の録文では、缺損している様を示しつつも、二字に書き起こして
いるが、相似た字形であり、そのうちの一字はあるいは衍字であるかもしれない。
「□離也」の□字も、本來は「莠」字であるべきところだが、残念ながら狩野録文
では分明を缺く。後半部の注釋「庸蜀羌髻□謂同名也」は『尙書・牧誓』の「及
庸、蜀、羌、髻、微、盧、彭、濮人」に基づく。これは孔傳が「八國皆蕃夷戎狄、
屬文王者」と説くように、周に付き隨った少數民族の名稱である。經文では八國
を擧げているが、ここではそれだけの字數がない。恐らくは最初の「庸、蜀、羌、
髻」だけを示したもので、「□謂同名也」の□は「皆」のような虚字が置かれてい
たものと推測する。

敦煌本の體例からすれば、髻字の注の最初には朱字で音が記されていなければ
ならない筈であるが、ここにはそれらしき痕跡が見られない。『説文』では、髻字
は「髻或省」とあり、髻の省體の扱いとなっているし、大廣益會本でも髻字は「同
上」とし、髻の惑體となっている。その意味では、呂浩氏が「由於髻又與上一字
(即髻字——高田) 同，故此處髻字讀音與上一字同，故此處不再給注音」とするのは
正しいといえる¹⁰。つまり『萬象名義』で髻字に「莫高反、髻字」と音を出すもの
の、髻字のほうに音注がないのは、異體字と見なしたからである。しかし『萬象
名義』で、ことさら髻字に「覲髻、莠離」¹¹ という義注を與えているのは、髻字と

⁹狩野の録文では「髻」とあるが、いま「髻」に改める。

¹⁰呂浩《篆隸萬象名義校釋》(上海：學林出版社、2007年)、80頁。

¹¹呂浩《校釋》「《爾雅・釋詁》：“覲髻，莠離也。”《名義》“覲”字爲“覲”字之誤，“髻”字爲“髻”字之誤。」

寫本にしても、現在の破損情況から想像を逞しくすれば、もともと他の寫本の補修紙として用いられたものが、後に剝離したものと想像することも不可能ではない。

おわりに

敦煌遺書中に見いだされる『玉篇』の寫本はまことに數少ない。本稿で取り上げた第三の殘片もまた英藏及び俄藏殘片と同じ寫本の離れと見られるので、これら三つの殘片は無慮數萬點に及ぶ敦煌遺書のなかでも唯一の存在ということになる。敦煌遺書全體のなかで唐代の寫本がさして多くないという時代的な偏りを考慮しても、敦煌ではこの字書があまり廣く利用されなかったことを示しているように思われる。『玉篇』は、後に『切韻』とともに「篇韻」と併稱され、廣範な利用者を獲得するに至る。しかしそれは大廣益會本に代表される孫強による増字減注本の系統を引く本であって、顧野王原本及びその流れに連なる『玉篇』はその高踏的な性格のために、民間では敬遠されることが多かったものと推測される。前後三百年に及ぶ唐代は大きな社會的變動の生じた時代であり、人々の文字言語に對する關わりかたも大きく變化した。多分に貴族的な性格を有する原本系『玉篇』が新しい社會階層から敬遠されたとしても不思議ではない。

詳細な典據を示した註釋を大膽に切り捨てる一方で、収録文字數を増補した孫強増字減注本がいち早く登場したのも、實際には時代に應じた改編の一形態であったことは言うまでもない。しかし唐代の『玉篇』には、異なった方式の改編を模索するものも存在したのであって、敦煌本『玉篇』はまさにその一つである。敦煌本『玉篇』を見ると、詳細な註釋はその多くを保存しながらも、煩雜を避けて個々の出典書名を示さず、音注も反切ではなく直音を用いるなど一定の簡素化の工夫が見られる。とはいえ經書など古典に典據を求める註釋のスタイルは、全體としてはやはり原本に近い姿を留めていることは否定できない。敦煌社會には必ずしも似つかわしくなかったであろう。『切韻』がその各種増補本をふくめて敦煌遺書中に少なからず見られることと比較すれば、『玉篇』の少なさが際立っているのはその所爲である。

(作者は京都大學名譽教授)